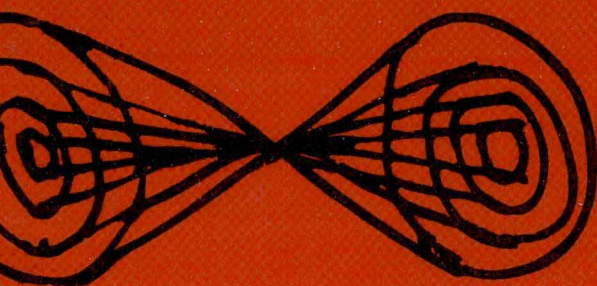


カヘ
ロツ
ツ
サセ



世界文學大系

55

へ ツ セ

青春彷徨 クリングゾル最後の夏
シツダルタ 光のふるさとへ
魔術師の略伝

カ ロ ツ サ

ドクトル・ピユルゲルの運命
ルーマニア日記 美しき恋いの年

山下肇・登張正実・手塚富雄・
西義之・大畑末吉・斎藤栄治訳

世界文學大系

55

筑摩書房版

世界文学大系 55

ヘ ッ セ

カ ロ ッ サ

昭和33年12月20日発行

定価 450 円

編 者 登 張 正 実

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(291)局7651

目次

へ
ッ
セ

青春彷徨

山下 肇 5

クリングゾル最後の夏

登張正 実 82

シツダルタ

手塚富雄 111

光のふるさとへ

登張正 実 171

魔術師の略伝

西義之 203

カロッサ

ドクトル・ビュルゲルの運命

大畑末吉 215

ルーマニア日記

登張正 実 251

美しき惑いの年

ヘッセへの感謝

光の秘密

解説

年譜

手塚富雄訳

310

F・シユト
リヒ

442

E・ベル
ラム

451

登張正実

464

装
幀
庫
田
發

へ
ッ
セ

青春彷徨

— ベーター・カーメンチント —

第一章

太初に神話ありき、である。偉大なる神は、その昔、インド人やギリシヤ人やゲルマン人の魂に住んで、神話をつくりだし、その表現をもとめて心を砕きたもうたが、同じようにまた、すべての子供の心のなかにも住んで、日ごと神話をつくりたものである。

ふるさとの湖水や山や小川がなんという名前なのか、私はまだ知らなかった。けれども私の目には、エメラルドグリーンの色を湛えたなめらかな湖面がこまかな光の玉を織りまぜて陽光のなかによこたわっている姿がみえ、冠をかぶったようにそのぐるりをとりまく峻しい山々やその頂の山ひだにきらきら輝く雪渓、ほんの小さく各所におちている滝、その足もとに果樹やヒュッテや灰色のアルプス牛が点々と散らばっている斜面の明るい牧場などがみえるのだった。そして、私の貧しく幼い魂はうつろなまま静かになにかを待ちもうけていたから、湖水や山の霊たちはその美しい大胆な行爲を私の魂に書き

つけた。断崖絶壁たちは、自分が生れ出たころの、いまだにその傷あとが消えないでいる太古の時代について、傲然と、しかし畏敬の念をこめて、物語っていた。そのころ、大地は裂け、折れ曲り、陣痛の呻きのなかに、苦しい胎内から、山巔や尾根を生みだしたのだ、とかれらは語っていた。岩山はめりめりと鳴動しながら突き出し、やたらに峰を盛りあげてはぼきりと折れ、双子山はさんざのたうちまわりながら場所とりつこのけんかをして、しまい一方が勝つと、弟をはねのけてもみくしゃにして、そびえたつのだった。今でも谷あいの高所のそここに、砕けちった峰や押しつけられて割れた岩がその当時のままかかっている、雪どけのたびに、奔流する水が家ほども大きな岩塊をころがし落して、ガラスのように粉々にうち砕くか、あるいはまた、強引にかつとばして柔らかない牧場の土中深くめりこませてしまふ。

これらの岩山は、いつも同じことを語っていた。そしてその断崖絶壁が幾重にも折れかさなつて、ひんまがり、裂けおち、いたるところに傷口が蓋をあけているのを見たり、かれらの言葉をききわけることはやさしかった。「おれたちはな、たいへんな苦しみをなめたんだ」とかれらはいふのだと。「今でもその苦しみが続いているのだよ」と。しかし、かれらのその言葉は、びくともしない古武士のように、誇らかに泰然自若としたおもむきがあった。

そうだ、たしかに武士だった。私はかれらが

たたかっているのを見た。すさまじい早春の夜、怒りに狂った南風が年古りた山巔のまわりを咆えたけり、谷の激流がかれらの土手へ腹から生身をもぎとるとき、かれらは水や嵐とたたかうのだった。こんな夜には、かれらは剛毅に根を踏んまえながら、暗く、呼吸をもつかず歯をくいしばって突つ立ち、風にこなごなに裂かれた壁や尖峰を嵐に向かって突きだし、あらん限りの力をふりしぼって強情にがんばっていた。そして傷を負うたびに、怒りと怖れのすさまじい音を響かせ、その怖ろしい呻きは、怒つたように断続的に、遠いはるかな谷という谷にこだました。

それから私は、牧場や、斜面や、土のついた岩の裂け目が、草や花の羊歯や苔で覆われているのを見た。それらには、昔から、土地の言葉でへんてこな意味ありげな名前がつけられている。山の子孫ともいふべきかれらは、それぞれ場所や色とどりに無邪気に生きていた。私はそれらに触ったり、観察したり、匂いをかいたり、名前を覚えたりした。もっと厳しく深く私を感動させたのは、樹木のながめであった。私は樹木の一本一本が、それぞれ違った生活を営み、独特の形姿と樹冠をかたちづくり、独自の影を投じているのを見た。私には、樹木は隠者か戦士のように、山にいつそうゆかりの深いものと思われた。なぜなら、どの木もみな、とりわけ山の高くに立っている木は、生存と成長のために、黙ったまま粘り強く風や天候や岩石

と戦っていたからである。どの木も自分の重さに耐えて、しつかりしがみついていなければならず、そのために、みんな独自の形姿と特別な傷を持っていたのである。嵐のために片側にか枝を出すことのできない赤松もあれば、赤い幹が、突きだしている岩のまわりに蛇のようにまつわって、木と岩とがたがいに身を引き寄せあい、支えあっているような赤松もあった。かれらは戦士のように私をみつめ、私の心に畏敬の念をめぐらせた。

このあたりの男たちも、女たちも、やはり樹木に似て、かたくなで、きついしわを持ち、無口であり、しかも、最もすぐれた人たちが最も無口であった。そこで私は、人間を樹木か岩のようにみつめ、かれらについて私なりの考えを持ち、静かな赤松に劣らずかれらを尊び、愛しすぎないことを学んだ。

私たちの小村ニミコンは、山の二つの突出部にはさまれた三角形の斜面にあり、湖水に面していた。道の一つは近くの修道院に続き、もう一つは四時間半ほど先の隣村に続いていたが、湖畔にある他の村々へは水路を渡っていくのである。村の家々は古い木造りで、どれも年代ははつきりわからない。新築されることなど、まあめつたになく、古い小さな家は、今年も床を、来年は屋根の一部を、というふうに必要な迫られるたびに一部改修されるにすぎない。以前には部屋の壁に使われていたらしい半桁や木舞が、今は屋根の桷になっているのを見ることがある。

それらがそこにも役立たなくなり、かといって焼却してしまうのはまだもったいないということになると、今度は家畜小屋か乾草置場の改修に、あるいは、戸口の横木舞に利用される。あたかもこれはそこに住んでいる人たちが自身のようである。だれもかれも自分の役目の果せるあいだは活躍するが、やがてためらいながら無益な者の仲間に加わるようになり、ついには、あまり見向きもされないまま、暗闇の中に消えてしまう。多年異郷にあって後、この郷里に帰ってくる者ですら、数軒の古い屋根が新しくなり、新しかった数軒の屋根が古くなっていること以外に、何の変化も見いだすことができない。昔の老人は亡くなっているが、そこにはちがった老人がいて、同じような小屋に住まい、同じような名前を持ち、黒い髪の子供たちの世話やきを同じようにやっており、顔の点でも、物腰の点でも、不在のあいだに死んでしまった人々とほとんど差別がない。

私たちの村に、外部から新鮮な血や生活が流れこんでくるのは、そうしげしげあることではなかった。かなり強健な種族である住民は、そのほとんどがきわめて密接な親類同士であり、カーメンチント姓を名乗るものが、優に四分の三を占めている。この姓は教会の名簿の数ページを埋め、墓地の十字架に書かれ、家々に、ペンキや粗雑な彫刻の表札となって、人目をひいている。馬車屋の車や飼料桶や湖水のボートにも、この姓名が読まれる。また、私の父の家の

戸口の上にも「ヨースト及びフランチェスカ・カーメンチント、この家を建つ」と書かれていたが、それは私の父のことではなく、その祖父であり私の曾祖父である人に当る。たとえ私が子供を残さずに死ぬようなことになっても、もし家がある時まであって、屋根をいただいておれば、やはりまたカーメンチント姓の者がこの古巣に移ってくることを、私は疑わない。

みたところ単調ではあるが、私たちの村民のなかには、悪人もいれば善人もおり、立派なものあれば取るにたらしぬものもあり、有能なものあれば低級なものもあって、多くの賢い人々のいるかたわらには、痴呆症患者はさておいて、馬鹿者どもがこっけいな小グループを作っていた。いずこも同じだが、大世界の小さな縮図を呈していた。大物と小者が、する賢いのと馬鹿とが、きつてもきれいな親縁縁故同士であったから、ひどい高慢さきと愚にもつかない気軽さがかいつ屋根の下で幾度もこつたがえし、そのため、私たちの生活は人間性の深淵とこっけいを窺わせるに十分な場所となっていたほどである。ただ、だからから秘密にされているか、だれにも気づかれないでいる重苦しヴェールが、この村の上に覆いかぶさっていた。自然力に頼りきっていることと、働けど働けど増すばかりの窮乏が、年月をへるうちに、たださえ老いぼれていく私たちの種族に憂鬱になりがちなる傾向を植えつけていたのである。この憂鬱は人々の鋭い鋭い顔に不似合ではなかったけれど、ただそ

れだけのことで、何の結果もたらさなかつた。少なくとも、喜ぶべき結果は全然もたらさなかつた。まさしくそのために人々にはばか者たちを樂しんでいた。かれらはいかにも澄ましていて、まじめではあるが、それでいて笑いや愚弄のきかけを持ちこむのだった。かれらの一人が何か新しい愚行をしてくだしてうわさをたてると、ニミコン村の人々のしわだらけの日焼けした顔には、喜びの色が稲妻のように輝いた。そしておかしなことそれ自体にたいする楽しみに、微妙なパリサイ人の薬味として、自己優越の満足感加わり、おれはこのような誤りや失敗はしないぞという感じから、悦に入つて、舌を鳴らした。裁判官と罪人の中間にいて、その両方から、好きなものならなんでも喜んで楽しもうというあの多くの手合いのなかには、私の父も入っていた。なにかばかげたことがもちあがれば、きまつて父はもう嬉しさをかくしきれずにおちつかなくなる。そんなとき、父はその當事者に同感して感心してみたり、自分にはそんな欠点がないことに大いに満足してみたり、その二つのあいだをこっけいなほどいったりきたりしているのだった。

当のばか者たちの一人に、伯父おじのコンラートがいた。とはいへ、彼が、たとえば私の父やその他のヒーローたちに比べて、思慮分別の点でかくべつ劣っていたわけではない。むしろ彼は抜け目のないちゃっかり屋で、太平楽な他人がうらやんでもいいほどたえず発明工夫を知

恵をしぼる才覚に追いまくられていた。しかし、むろん、一つとして成功はしないのだった。それでいて、がっくり首を落してなすところなく鬱ふさごこむようなふうはみせず、いつもまた新たなことをやりはじめ、自分自身の計画の悲喜劇を妙にたのしむような元氣なところをもつていて、それはたしかに彼の長所というものであった。だが、それがまた彼のおかしな変わったところとみなされて、無料で見物できる村つきの道化役者の一人に数えられていた。この伯父にたいする私の父の態度がまた、感心と軽蔑のあいだをたえず往復する動揺そのものだった。義兄が新しい目論見をたてると、そのたびに父は強い好奇心と興奮とにそそのかされ、探りを入れる皮肉めいた質問やひげらかす言葉の背後に、その色を隠そうとしても隠しきれなかつた。やがて伯父が成功疑いなしと思ひこんで、大げさな身ぶりをしてはじめると、父もそのたびにまた夢中になり、相場師の仲間気どりでこの天才に首つたけになり、あげくのほかに、避くべからざる失敗が訪れて、伯父が肩をすくめてみせると、父はぶりぶり怒って彼に嘲罵をあびせかけ、数カ月も彼に鼻もひっかけないといった調子だった。

私たちの村が帆船船というものに初めてお目にかかったのは、このコンラートのおかげだった。それには、私の父の小舟が利用されねばならないのだった。帆や帆綱の細工は、カレンダーカレンダーについた木版画にならつて、伯父の手で小織

麗麗に仕上げられ、けつきよく、帆船にすわるにはうちの小舟では細すぎたといふことも、コンラートの責任ではなかつた。準備には幾週間もかかり、父は緊張と希望と不安のためにほとんど水銀のように身のおきどころを知らず、他の村人たちもまた、コンラート・カーメンチントの新企画のうわさでもちぎりのありさまだった。風の強いある晩夏の朝、この舟がはじめて湖水にのりだすことになった日は、私たちにとつて記念すべき日であつた。父は、とんだことになりはすまいかという臆病な胸騒ぎでわざと近よらずにおり、私にたいしても船への同乗を禁じて私を大いに悲しませた。パン屋の息子のフェースリだけが、ひとりこの帆船船技師のお伴をした。しかし、村じゅうは総出で湖水の砂利場や庭に立つて、前代未聞のこの見物に参列した。湖面にむかつてかろやかな東風がそよいでいた。船がうましくこのそよ風にのるまで、最初のうちは、パン屋が漕がねばならない。やがて船は風をはらみ、ほこらかにすべりだしていった。私たちは、船がすぐ手前の山鼻をまわつて消えていくのを驚嘆の目でみまもつていた。そしてこの達者な伯父が帰ってきたら彼を勝利者として迎え、私たちが人をばかにしたあさはかな心眼を恥ずかしくおもわねばならないと考えていた。ところが、夜になって、船がもどつてきたとき、船にはもう帆がなくなつていて、乗組員たちは生命からがら死んだようになっており、パン屋の倅せがれはとにかく咳せききこみながらいったものだ、

「みんな、たいしたお楽しみがふいになつたぜ。うまくすりゃ、この日曜に、お葬いの大ごちそうを二つもありつけるところだったに」父は船の修繕で新しい板を二枚もとりつけねばならず、爾来、二度とふたびこの青い湖面に帆影の映ることはなかつたのである。それから当分のあいだ、コンラートがなにかせかせかしている、そのたびにうしろから声がかつた。

「コンラート、それ、帆をかけたたり、かけたたり！」

父は怒りの虫を噛みころして、永いこと、このあわれな義兄にでくわすたびに、ぶいと横をむいて、口にはいえない軽蔑のしるしに、ペツと大きく空中に弧を描いて唾をはいた。その習慣がはたしていつまで続いたかという、それはやがてある日のこと、コンラートが耐火パン焼き籠の新家をたずさえて彼のところへ吹きにやってきた時までのことだった。この新家たるや、ついにこの発明家の肩に無限の嘲笑を背負わせ、私の父に現なま四ターレルの損害を負わせたのである。この四ターレル事件の思い出をわが父にあえて思ひださせようとするものこそ禍いあれだ。ずっと後になって、わが家がまた金にこまっていたころ、母親があるときふと口をすべらせて、今ごろあの罪なムダ金が残っていてくれさえすりゃあねえ、といった。父は首のつけ根まで真赤になつたが、やっところえるようにして、たつたひとこと、「おれだつたら、日曜日たつた一日で、あの金を飲みつぶしちま

いたいところだぜ」といった。

いつも冬の終りになると、低いざわめきをたてながら南風(フタケ)（つづける熱い春の季節風）がやつてきた。アルプスの人々はこの音を怖れおののきながら耳にし、異郷にあつては、胸苦しい郷愁をもつてこれにあこがれるのだ。

南風が近づいてくるときには、幾時間も前から、男も女も、山も森も家畜も、いちちやくそれを感ずる。いつもたいてい冷涼な向かい風がその前ぶれに吹いてきて、それから、なま暖かい低いざわめきが、その襲来を告げしらせる。

すると、青みどりに澄んだ湖水が分秒にして墨を流したように黒くなり、たちまちせわしげな白い波頭をたてはじめ。数分前までは物音一つたてずになごんでいた湖水が、やがて、海のようににはげしい浪しぶきをあげて、岸にうちよせどよめきだす。と同時に、あたり一面の風景は不安におののいて身をすりよせあう。いつもならおっとりとして遠く離れて物思いにふけつていける峰々の上が、今は一つ一つ岩を数えることができ、ふだんは広大無辺な中にぼつぼつとほんの茶色の斑点のようになかみえない村々が、屋根や破風や窓まで見わたることができ。山も牧場も家々も、すべてが、怖れおののく家畜の群れのように身をすりよせる。それから、遠雷のようなざわめきと地鳴り震動がはじまる。鞭打たれたようにたけりたつ湖水の浪は、霧のようになましくらに虚空をかけり、おやみなく、とりわけ夜は、嵐と山との死闘する音がきこえ

る。やがて一時の間をおいて、埋まつた小川、崩れた家、壊れた小舟、行方不明になつた父や兄弟などの知らせが村々をつたつて喧伝される。幼いころ、私は南風がこわくて、きらいでさえあつた。だが、だんだん腕白時代になるにつれて、私は、この、春を運んでくる永遠の若者、大胆不敵な叛逆の闘士、が好きになつた。南風がふんだんな生命の希望をみなぎらせて荒れさび、笑いさんざめき、呻き声をあげながら、あらあらしい激闘を開始し、咆えたけつて谷あい吹きぬけ、山々から雪をむさぼり、たくましい赤松の老樹を荒くれた手でねじまげてせつない吐息をたてさせるさまは、みるからにすばらしい壯観だった。後には、私の愛はいっそう深まって、この南風を通して甘美で豊穡な南国をおもい、常にかかわらず快楽と温暖と美の泉をこんこんと湧きださせてその果ては山々にぶつかつて千々に砕け、寒冷な北国の平地に疲れて死にたえる南風に、心から挨拶するようになつた。甘美なる南風熱ほどふしぎな貴重さをもつたものはない。この風の季節になると、山国の人々、とりわけ女たちは、この風に襲われて眠りを奪われ、あらゆる官能を撫でさすられ、かきたてられるのだ。内気で貧寒な北国の胸にくりかえし嵐のように燃えたと身を投げかける南風は、雪に埋れたアルプスの村々に、もうすぐ近くのイタリヤの湖水では桜草や水仙や巴旦杏の枝がふたたび花咲いていることを告げ知らせるのだ。

やがて、南風が吹きやんで薄汚れた最後の雪崩が融けきつてしまうと、なにもまして美しいものがやってくる。すると、山沿いのありとある側面に、淡黄色の花模様らしい牧場がのびひろがり、雪の峰と氷河がくつきりと清らかに高くそそりたち、湖水は青くぬるみ、太陽と雲の去来を映す。

こうしたすべては、すでに幼き日を豊かにし、要すれば人の一生をさえも満たすに十分である。なぜなら、これらすべては、人の唇の端にはのぼることのない神の言葉を朗々と声高らかに語るからだ。その言葉を幼い日々聞いたものには、生涯のあいだ、それが美しくも強く怖ろしい余韻となつていつまでもひびき、その呪縛からのがれることがない。山をふるさととするものは、なにがしかの年月、哲学や博物誌を研究して古き主神をおろそかにすることもあろう——だが、いつかはまたふたたび南風を身に感じとり、あるいは、雪崩が森を踏みしだいて落ちる音をききつけると、彼の心は胸のなかでわななきふるえ、神のこと死のことを彼は思うのである。

父の小さな家に接して、垣をめぐらずちつぽけな庭があった。そこには、みずみずしいちさや蕪やキャベツがつくられ、そのほか、母が草花のためにいじらしいほどさややかな花壇をしつらえてあつて、二株の月並みなバラと一かたまりのダリアと一握りほどの木犀草とがたよりなくわびしげにしおれていた。この庭の突きあたりにも、もつと小さい砂利の空地があり、それが湖水まで達していた。そこには二つのいたんだ桶と数枚の板とがあつて、下の水面には、私たちの小舟が繫いであつた。それは当時はまだ数年ごとに新しく修繕したりタールを塗りかえたりしていたので、そういう仕事をやった日のことは、はつきり私の記憶にのこっている。それは初夏のあたたかい午後のことだ、小さな庭の上を硫黄色の蝶の群れが陽なたに酔つたように飛びかき、湖水は油を流したように青く澄んで静かに微光をはなち、山のいただけは薄霧に包まれて、小さな砂利場にはタールとペンキの匂いがぶんぶんしていた。あとあとまで、ずつと夏じゅうまでも小舟はタールの匂いを漂わせていた。何年も後になつて、どこかの浜辺で、水の香とタールの臭気の混つた気配がぶんと鼻につくたびに、私はすぐこの湖畔の砂利場をまのあたりに思ひうかべ、父が腕まくりして刷毛を動かして、彼のパイプから薄青い煙りが静かな夏の気味のなかにたちのぼり、真黄色な蝶の群れがおぼつかない差らいをみせて舞っているのをありありと見た。こういう日には、父はいつになく上きげんで、得意の韻音で口笛を吹いたり、おそろくはまたいづつかの短いヨーデル節(方の民謡)の一節さえ、ほんの低い声ではあるにせよ、ひとりでくちずさんだ。そんなとき母は晩になにかごちそうをつくるのだつたが、今にして思えば、亭主のカーメンチントが今晩居酒屋へ出かけてくれないようにというひそか

な願いからの料理だつたらしい。だが、やはり彼は出かけていった。

この両親が、私の幼い情操の發展を、とくに促したとも妨げたとも私にはいえない。母はしょつちゅう手にあまる仕事を抱えていたし、父はこの世でおよそ教育問題ほど相手にしないものはないという人間だつた。数本の貧弱な果樹の手入れをしたり、ちつぽけな馬鈴薯畑を耕したり、乾草の様子をみたり、彼も結構いそがしかった。しかし、およそ数週間たつごとに彼は夕方出かける前に私の手をとつて、黙つて私をつれて、家畜小舎の上にある乾草道場へ姿を消すのだった。そこで、それから、奇妙な懲罰と贖罪行為が行われた。つまり、私はひとつきり打たれたわけだが、それが、何のためなのか、父にも、まして私にはなおさら、よくはわからなかつた。それは因果応報の女神ネメシスの祭壇にささげる沈黙の犠牲であつて、父が叱るでもなく私が泣き叫ぶでもなく、ある神秘的な力にたいする義務的な真物のようにしてささげられたのだ。後年、おりにふれて、「盲目的な」運命という話が出るたびに、いつも私はこの不思議な場面をまた思ひうかべ、この概念のはなはだ具体的な表現のようにおもわれた。そんなことを知るわけもなく、善良な父は、人生そのものがわれわれにたいして施すことを常とする単純素朴な教育法にしたがつていたので。人生はときおり晴れた空からいきなり雷雨を送つてよこし、われわれに、いったいどんな悪いこと

をしたためにこんな天上の怒りに触れたのかと
考えさせるにまかせておく。残念ながら、私の
場合は、こういう考えをせんぜん、めつたに、
おこしはしなかった。むしろ私はそうした望ま
しい自己反省はいっこうにしないで、この分割
払いの懲罰を平氣の平気で泰然と受けながし、
そういう晩には、やれやれこれでまた税金の払
いをすませたからまた数週間懲罰までに間が
かせげたわいといつもよろこんだものである。こ
れよりもはるかに私が自発的に反抗したのは、
老いたる父が私に仕事を教えこもうとすること
にたいしてだった。自然というものはわけのわ
からぬ無駄使いをするもので、私という人間に
二つの相矛盾した贈り物をいっしょにくれてい
た。つまり、並みはずれた体力と、遺憾ながら
少なからず仕事をきらう性分とである。父は私
を役にたつ助手兼用の息子に仕立てようと全力
をかけたわけだが、私はあらんかぎりの知恵をし
ぼって課せられた仕事を逃げ、中学時代になっ
ても、古代の英雄たちの中であの有名な厄介仕
事をおしつけられたヘラクレスにいちばん同情
したものである。ここ当分、私にとって、岩の
上や牧場や湖畔をふらふらほつつき歩くことほ
ど楽しいものはなかったのだ。

山と湖水と嵐と太陽とが私の友だった。かれ
らは私にむかって語りかけ、私を教育し、長い
あいだ、どんな人間やその運命よりも私は好
ましく身近だった。しかし、きらめく湖水や悲
しげな赤松や陽光にかがやく岩にもまして私の

愛したものは、雲であった。

この広い世界で、私ほど雲をよく識り、雲を
愛するものがあつたら教えてほしい！ いや、
この世界に、雲より美しいものがあつたら教え
てもらいたい！ 雲は遊びであり、眼の慰めで
ある。祝福であり、神の贈り物である。怒りで
あり、死の力である。雲は生れたばかりの嬰兒
の魂のように優しく柔らかで平和であり、よき
天使のように美しく豊かで恵みふかく、また、
死の使者のように暗く、逃れがたく、無慈悲だ。
雲は薄い層をなして銀色にただよい、笑うがご
とき白帆を金色にふちどつてたのしく進み、黄
や赤や薄青の色美しくいろいろだれ、静かにやす
らう。雲は刺客のように人知れず徐々に忍びよ
り、韋駄天騎手のように風をきつてひた走りに
天がけり、また、暗鬱な隠者のように悲しげに
夢みるごとく蒼ざめた虚空にかかっている。雲
は幸福な鳥々のかたちを、祝福する天使たち
の姿をし、また、脅かす手にも似て、はためく
帆、わたりゆく鶴でももあるかのようにだ。雲は、
神の天国と貧しき地上とはさまに、ありとあ
る人の子のあぐれの美しき比喩のごとくただ
よつて、天と地の両者に属し——それは、汚れ
た魂を清らかな天にまつわりつける地上の、夢な
のだ。雲は、あらゆる漂泊と探求と、渴望と郷
愁との、永遠の象徴だ。そして、雲が天地のは
さまをつつましく、しかも頑強に、憧憬こめて
たゆたっているのと同じように、人間の魂も、
時と永遠とはさまに、つつましく、しかも頑

強に、憧憬こめてたゆたっているのだ。

おお、雲よ、美しくただよう休みなきもの
よ！ 私はまだ無知な子供だった。雲を愛し、
雲をながめる私自身、まだ私もまた一片の雲の
ように人生をさまよひ歩き——時と永遠のはざ
まにただよつてどこにも定住することを知らぬ
旅人なのだということを知らなかった。幼いこ
ろから、雲は私にとって、愛する女友だちであ
り姉妹であった。私が露地をわたると、もう私
たちはたがいになすきあい、挨拶をかわし、
一瞬目と目を見つめあつた。そのころからか
ら学んだものも、私には忘れられない——その
かたち、その色、そのゆきかいと遊戯のさま、
輪舞と踊りと休息と、またその奇妙に地上的で
もあり天国的でもある物語と。
とりわけ、それは雪姫の物語だ。舞台は中く
らいの山、時は初冬の暖かい下風が吹くころ。
雪姫はわずかの従者をつれておそろしく高いあ
たりから姿をあらわし、おりてきて山の広い窪
地や頂上の台地に休息の場所をさがしとめる。
性悪の北東風が無邪気な姫の憩いの姿をみて嫉
妬心をおこし、ひそかに欲望をもやして山に吹
き上がり、いきなり狂暴に猛然と姫に襲いかか
る。そして、美しい姫に黒いざんざん雲を投げつ
け、姫を嘲弄し、騒ぎ立てて、山から追いはら
おうとする。姫はしるし不安の面持ちでじつと
待ち、こらえている。ときには首をふつて、嘲
けるようにそつとまたもときた空へ舞いもどつ
ていくが、またときには、不安げなお伴の女た

ちをとつぜんまわりに集めて、面被オモカシをぬいで眩くらしいばかり威厳のある容貌をあらわにし、冷やかに手をあげて怪物の風に退散を命じる。風はよろばい咆えつゝ逃げていく。姫はそこで静かに身をよこたえ、その憩いの床のあたりを着い霧のなかに包んでしまう。やがて霧がはれると、窪地も頂上も明るく光りかがやき、清らかな柔らかない新雪におおわれている。

この物語のなかには、なんとなく気高い、美の心と勝利の歌がこもっているようで、私を恍惚まぼろしとさせ、私の幼い心を楽しい秘密のように動かした。

まもなく、私自身、雲に近づき、雲のあいだへわけ入って、雲の群れのできるさまさまなものを上のほうからながめることのできる時もやってきた。私が最初に山の頂上をきわめたのは十歳のときだった。私たちのニミコン村がふもとになっていたゼンアルブ岳ツェンアルブという山である。そこで私ははじめて山々の戦慄せんりつと美とをみたのだ。氷と雪どけ水でいっぱいな、深く切りこんだ峡谷、緑ガラスのような氷河、ぞつとする氷河堆石こころい、それらすべての上に、釣鐘つりかねのようにまると高くひろがる青空。十年のあいだ山と湖水のあいだにはさまれて暮し、高く身近に迫る山に押しつけられたようにとりまかれてきた者にとって、生れてはじめて頭上にひろがって大空がひろがり、目の前にはてしない地平線がひらけた日の体験は忘れられない。登山の途中からもう私は、下からよく見なれた崖や岩壁が

とつともなく大きいのをみてびっくりした。そのとき、私はその一瞬に完全に圧倒されて、いきなり、巨大な広がりをもった空間が、不安とともに、そして歓呼かんこのどよめきとともに、私にむかつて襲いかかってくるのをみた。それじゃ世界というものはこんなにもとつともなく大きなものだったのか！ はるか下のほうにおぼろに横たわる私たちの村全体が、ほんのちっぽけな明るい斑点にすぎない。谷間からみてびつたりくつきあっているようにみえた峰が、何時間もの距離ほど遠くたがいに隔たっている。

そのときやと私は、まだ自分が世界をほんの細目でちらつとみただけで、ろくにまともにはみていなかつたことを醜みにくろげに感じ、私たちのへんびな山村にはさつぱり便りがこなくともこの大自然には山がそびえ、山が崩れ、大きな事件が起つているのだというのに気がつきはじめた。しかし、同時にまた私の心のなかの何ものかが、羅針盤ろしんぱんの針のようにびりりとふるえて、あの大きいなるはるかかなたへ否定なしに無意識的にひきつけられ、求めむかっているとするのだ。そして今、なんという無限のあなたへ雲がさすらつていくかをまのあたりみて、その雲の美しさと憂愁もやつとよくわかつたようなな気がした。

私を連れていってくれた二人の大人おとなは、私がよく登つたといつて褒めてくれ、水のように冷たい頂上にすこし休んで、私にわれを忘れて大喜びなのを笑つた。けれども、私は、最初の

大きな驚きが終ると、嬉しさと興奮とでまるで牛のように大きな声で、澄みきつた大気にむかつて咆えた。これこそ私が美にたいしてうたいたい最初の無韻の歌だった。私は大きな山彦やまひこが轟とどろくようにかえしてくるものとばかりおもっていたのに、私の叫び声は弱々しい小鳥のさえずりのように静かな山中へあとかたもなく消えていってしまった。私はひどく恥ずかしくなつて、じつとおとなしくしていた。

この日が私の生活に、ある活路をひらいた。というのは、それから次々と新しい出来事がやってきたからだ。まず第一に、私はそれからたび登山に、それももつと骨のおれる登山にも、連れていわれるようになり、山々の偉大な神秘のなかにわけ入つて、妙に締めつけられるような歓喜を味わつた。さらに私は山羊番やまぎの牧童の役をいつかり、いつも私が山羊を追つていくことになつた山腹の一つには、コバルト色の竜胆りゅうたんや薄くれないのゆきのしたが一面においしげつた風よけ場の一角があつて、これが私のどこよりも好きな場所になつた。村はそこからは見えない。湖水もほんの岩ごしに細い光つた縞しまのようにみえるだけで、そのかわり、花々が笑いさんざめくような色香もみずみずしく燃えつつやうに咲きにおい、そそりたつ雪のいただきの上には、青空が天幕のようにひろがっていた。美しい山羊の鈴の音が鳴りひびく中に、ほど遠からぬ滝の音もおやみなくどうどうと聞えていた。その日向に寝ころんだ私は、白雲の

ゆくえをじつと追いつづけ、ひとりヨーデル節を低くくちずさんだりしていると、はては山羊たちが私の怠けぶりに気がついて、やっつてはならぬいたずらや馬鹿ぶざけをいろいろとやりだそうとするのだった。そしてまもなくまだ二、三週もたぬうちに、私は迷子になった一匹の山羊もろとも谷間に墜落して、この私のすきな阿呆宮にひどいひびを入らせてしまった。山羊は死に、私の頭蓋は痛み、その上さんさん私は両親からぶたれて、しまいには逃げだした上泣いてあやまってやっつとまた家へ入れてもらつた。

こんな冒険は、次第によつては、もうあつさりと最初にして最後のものにするこもできたろう。そうすれば、こんな小説を書くこもななく、その他いろいろのばかけた苦勞もしなくてすんだらう。おそらくはだれか親類の女と結婚しているか、どこか氷河のかたすみに凍え死んでしまったかもしれない。それもまた悪くはなかつた。しかしなにもかも違つたこもなかつた。そうなつてしまつたこもとならなかつたこもと比較してみてはじまらない。

父はヴェルストルフの僧院に時おりちよつとした奉仕をしていた。ところが、あるとき病氣だつたので、私にこもわつてくるようにいつけた。ところが、私はそれをしないで、隣家で紙とペンを借りて、僧院の坊さんたちにあて一通の丁寧な手紙を書き、それを使ひの女にもたしてやつて、自分はひとり山のかへ出かけ

ていつた。

翌週のある日、私が家へもどつてみると、一人の長老僧がきていて、みごとな手紙を書いた当人を待ちうけていた。私はすこし不安になつたが、坊さんは私のこもを褒めて、老父にむかつて、この子を自分のこもで勉強させるよう説得しようとした。伯父のコンラートがちよつどそのこもふたたび父の好意をうけていたときだつたので、さつそくその相談をうけた。もちろん伯父はたちまち熱をあけて、私が勉強してやがては大学にも進み、立派な学者にならねばならないこもに賛成した。父は口説きおとされた。こうして、今や私の将来も、耐火バクン焼き籠や帆前船やその他多くの夢想と同じように、伯父の危なかつかしい計画のこもに加わつたのである。

すぐさま勉強が、とりわけ、ラテン語、聖書物語、植物、地理の勉強がはじまつた。それらすべてが私にはみなおもしろくてたまらず、そういうおかしなものもがきつと私の故郷や美しい青春の歳月を犠牲にしてしまふだらうなどとはゆめにも思わなかつた。それはラテン語だけのせいではない。たとえ私が聖書物語の名高い人物をすつかりくまなく暗記できたこもで、父は私を百姓にするつもりだつた。しかし、賢明な父は私の性根をよくみぬいて、どうにもならぬ怠惰がその重心となり根本の不道德になつてゐるこもを知つていた。たしかに私はなんとかいつつも仕事から逃げ出して、その代りに山や

湖水をもとめて馳せまわり、あるいはこつそりと人目につかぬ山かげに隠れて、本をよんだり夢想したり、ぶらぶら怠けていたりしてゐたのだった。このこもを認めて、けつきよく父は私を手離したのである。

この機会に、私の両親のこもをてみじかに述べておきたい。母はむかしは美しかったが、今はただ引き締つたまつたすくなくからだつきと優美な黒い瞳にその面影がのこつてゐる。大がらで、とても力があり、勤勉で、もの静かなたちだつた。父と比べても十分ひけをとらない聡明さをもち、体力では父をしのいでいたけれども、彼女は自分で家の采配をふらずに、それは夫に任せていた。父のほうは中くらしい背だけで、細いきやしゃな手足をもち、がんこで小才のきく顔をしており、色白な顔ぜんたいにひどくよく動く小じわがいつばいできていた。その上、眉間には一本短い垂直な縦じわが刻まれており、眉を動かすたびに、それが黒い影になつて、不きげんに悩んでいる顔つきになつた。そんなとき、彼はなにかひどく大事なこもを思ひだそうとして、自分でも思ひだすあてがないかのようになみえた。ある種の憂鬱が彼には認められたといえるのだらうが、そんなこもに注意するものはだれもいながつた。われわれの地方の住人は、ほとんどみながみな、いつもかるい鬱いだ気分にとらえられていたのだから。その原因はといえば、長い冬、さまざまな危険、たえざる苦勞、世間から隔離された生活、なのだ。

私の本質の重要な部分は、両親からうけついでものである。母からは、わずかながら世故にたけた生活上の知恵と、いささかの神への信頼と、もの静かな口数すくない性質を。それに反して、父からは、容易に決断できない遅疑逡巡と、金銭の扱ひについての無能と、大いに得意になって飲む腕とを。だが、この飲み癖は幼いころの私にはまだあらわれていなかった。外面上では、私は、父からは目と口とを、母からはどっしり重いがんばりのきく歩きぶりからだしつき、それから、強靱な筋肉の力とをうけていた。父と、さらにわれわれの種族一般からして、私は生れながらに農民のこすからい分別と、また同時に、わけもなく重く鬱々こみがちな暗い性質とをゆずりうけた。長いあいだ故郷をはなれて異国の人たちのあいだをめぐりあるくのが私のさだめであった以上、こんな性質のかわりにも、いくらかすばしくて陽気な快活さをもちあわせていたほうがすつとましであつたらうに。こうした資質をわかち与えられ、一着の新調の服を用意してもらつて、私は人生の旅にのぼつたのだ。故郷を出て、それ以来広い世間に自分の足で立つたのだから、両親のくれた贈り物もしだいに確かめられていった。けれども、私には、いくら学問をしても世間の暮しになれても決して償いのつかないような何かしらが欠けていたのにちがいない。私は今日でもむかし同様、山を征服し、十時間の道を行進し、舟をこぎ、必要とあれば、素手で一人の男を打ちたお

すぐらいのことはできるけれども、しかし、処世の術のないことといえ、今日からまた当時とすこしも変らないのだ。早くから土や植物や動物とばかり一方的に交際していたために、私には社会的な能力がほとんど育たなかつたのだ。今でも、私の夢は、遺憾ながら、私がいかに純動物的な生活に愛着しているかの奇妙な証明ばかりである。つまり、私は同じ夢を非常によくみるのだ。私が動物、それもたいして海豹になつて海岸にねている夢である。それで私は非常な快感をおぼえ、目がさめると、自分がふたたび人間としての尊敬をそなえていることが、悦ばしく誇らしく思えるどころか、むしろただ悲嘆をもつて自認するばかりなのだ。

よくある伝で、私はあるギムナジウム(中学とあわせてようなドイツの)で授業料も食費も免除されて教育をうけ、言語学者となるようにきざられていた。なぜなのか、それはだれにもわからぬ。これほどなんの役にもたぬ退屈な専門はないし、これほど私に縁の遠い科目もないのだ。

学校時代は私にとつてたちまちのうちにすぎた。けんかと学校とのあいまには、ホームシックでいっぱいになる時もあり、無鉄砲な未来の夢でいっぱいになったり、学問にたいする畏敬の念でみたされる時もあった。だが、こゝでも時おり私の生れつきの怠け癖が顔をだし、いろいろとしゃくの種や懲罰を私は背負ひこまねばならず、やがてまたなにか新しいことに熱

中すると、それは退散していくのだった。

「ペーター・カーメンチント」とギリシャ語の先生がいった。「君は強情っぽい変人だね、いつかそのこちこち頭を叩きわるときがくるだろうよ」眼鏡をかけたデブの先生を私はながめて、彼の話にききいりながら、おかしな先生だなどおもつた。

「ペーター・カーメンチント」と数学の先生がいった。「君は怠けること天才だね、零点以下の点数がないのが残念だ。君の今日の成績はマイナス五分分にしておくれよ」私は先生をじつとみつめ、彼がやぶにらみなのを気の毒におもひ、えらく退屈な教師だなどおもつた。

「ペーター・カーメンチント」と、あるとき歴史の教授がいった。「君はよい生徒じゃないが、でもよい歴史家になれるだろう。君は怠けものだが、大事と小事をみわけることを心得ているからな」

これもべつだん私にはたいしたことではなかつた。でも、私は先生たちにたいして敬意をいだいていた。先生たちには学問がある、と私は考え、その学問にたいして私は漠然とした強い畏敬の念をもつたからである。先生たちはみな私の怠け者であることとを一致して認めていたが、それでも私は進級して、席次は中より上だつた。学校や学校で教わる学問がほんのところに足りない些細のものにすぎないことを私はよく知っていた。しかし、私はその後にくるものを期待していた。こうしたさまざまな準備やきまりきつ

た課業の背後に、純精神的なものを、真実の、疑いもなく確実な学問を、予想していた。そこまでいけば、歴史の暗中摸索的な混乱も、諸民族の闘争の数々も、すべての個々人の心にある不安な問題も、その意味するところがわかってくるだろう、と。

私の心には、もう一つ別な憧憬が、もっと強く生きいきとはたらいっていた。私は友だちがほしくなったのだ。

褐色の髪をしまじめな少年がいた。私より二つ年上で、名前をカスパー・ハウリといった。彼は挙措動作がもの静かでしっかりしていて、男らしく頭をきりつとまじめに押し、仲間ともあまり口をきかなかつた。私はこの少年を何カ月ものあいだ大きな尊敬の気持でふり仰ぎ、往來では彼のうしろにくっついて歩いて、なんとか彼に気づかれないとねがった。彼が挨拶する人なら、どんなくだらぬ市民にも私は嫉妬を感じ、彼が入りするのをみかけたどんな家にも羨望をいだいた。しかし、私は彼よりも二級下であり、彼は彼自身のクラスのものにさえ優越を感じているようだった。私たちのあいだには一言も交わされることがなかった。だが、彼に代って、一人の小さな病身らしい少年が、私のほうで何もしないのに、向こうから私に近づいてきた。彼は私よりも年下で、内気で、才能にも恵まれていなかったが、しかし、悩ましいような美しい眼と容貌をもっていた。彼はからだが弱く、すこしせむしであったから、彼のクラ

スでいろいろと迫害をうけ、強くて声望のある私に保護者になってほしかったのだ。まもなく彼は病氣になって、もう学校には来られなくなった。彼は私にとって必要という存在ではなく、私はすぐに彼のことを忘れてしまった。

ところで、私たちのクラスに、金髪の腕白坊主が一人いた。彼は手品師で、音楽師で、役者で道化者だった。私はいくらか骨を折って彼の友情をえた。この同年の陽気なちび助はいつとも私にたいして少しばかり恩に着せるような態度をみせたが、いずれにしろ、私はこれで一人の友をもつことになった。私は彼の部屋を訪ねて行って、彼といっしょにいくつかの本をよみ、彼のためにギリシャ語の宿題をしてやり、その代り算術を彼に助けてもらった。二人はまたよくいっしょに散歩もした。そんなとき二人は熊と貂のようにみえにちがいない。いつも彼がしゃべり手で、快活で機智に富み、けつしてとまどいせず、私のほうが聴き手になり笑い手になり、こういう愉快な友だちをえたことをよろこぶがわだった。

ところが、ある午後のこと、思いがけなく私は、このちびの大道芸人が学校の廊下で、数人の仲間を前にして、彼の得意のこっけいな見世物の一つを巧みにやってみせているところに出会わした。ちょうど彼はある先生のまねをしてみせたところで、今度は彼は、「さあ、こいつはだれだか、あててみる！」と叫びながら、大声でホーマーの詩を二、三行読みはじめた。そ

れはそっくりそのまま私のまねをしたのだった。私のどきまぎする態度、おそるおそる読むよみかた、ひどく粗っぽい高地風の発音、いつもの私の注目するしかた、目をばちばちやって、左の眼を閉じる様子など、それはとてもこっけいにみえ、できるだけ機智たっぷり、しかも冷酷にまねされたのだ。

彼が本を閉じて、それにこたえる喝采をあげたとき、私はいくら彼に近づいて、仕返しをした。私はいくべき言葉を知らなかったが、自分の全身の怒りと羞恥と激情をたつた一つのはげしい耳打ちにせいっぱいこめたのだ。それからすぐと授業がはじまり、先生はもはや私の友ならざるその少年の泣き声と赤く腫れた頬とに気がついた。おまけに、少年は先生の大のお気に入りだった。

「君をそんな目にあわせたのはだれだね」
「カーメンチントです」
「カーメンチント、前へ出ろ！ それは本当か」

「ええ、そうです」

「どうして彼をぶつたのかね」

私は答えない。

「何の理由もなくやったのか？」

「はい」

そこで私はひどい罰をくわされ、いささかも動ずるところなく、無実の罪に鞭打たれるものの快感を味わった。しかし私は禁欲克己のストア派でもなければ聖者でもなく、いっかいの学